

# 恩返し 202102

数日前に電話が入り、ずっと私の映画を応援してくれていた人のヒト리가、急逝された・・・とのことだった。

映画ができる度に観に来てくれて、ニコニコ微笑んで「よかったです・・・」と、言ってくれる人でした。

してもらってばかりで、なんにも御返しができなかった、と悔やむばかり・・・

無計画に映画を創り続けて、何人もの方々にご迷惑をかけ続けてきた自分を、思い返します。

この冬は、いせフィルムを応援してくれている全国の方々に、上映やDVD-BOX発売のお知らせ等の便りを書きまくってました。

自主製作・自主上映を始めた頃は数十人だった応援者のリストも、今では数千人になります。その一人ひとりのお力添えが、私の無謀ともいえる映画創りを支え続けてきてくれた、と思っています。

このところは、映画祭の審査委員なども頼まれたりして、つい最近まで「生意気な若手」といわれていたのに、いつの間にか「生意気な年寄り」になっちまった。

「生意気」なところだけは変わらないような気がするけど、言葉を変えれば「ヒトリヨガリ」ということかもしれない。

でも「ヒトリヨガリ」がなくなったら、自分が映画を創る意味がないもの・・・。マスメディアには「ヒトリヨガリ」とはいえない、賢い創り手はたんといからね。私のような、私たちのような、数少ない孤軍奮闘の一人ひとりの存在こそが、普通の

一人ひとりの記録を遺し、確かな歴史を遺すのだと思いたい。

映画の歴史が始まったたかだか100年余り、あの80年前に終わった戦争の時代の記録さえ、まともに映像として遺されていないことを思えば、今、私たちが「ヒトリヨガリ」に目の前の記録を遺そうとしなければ、大げさに聞こえるかもしれないけど、歴史は次の時代に引き継がれないと考えている。

今は、ちゃんとマスメディアが記録を遺しているから大丈夫・・・と思っている方々も多いかもしれないが、本当にそうだろうか・・・。

私は、私の眼差しの届くかぎりの記録を「ヒトリヨガリ」にヒューマンドキュメンタリーとして遺そうと思う。たとえ今は、ほんのちょっとの人しか観てくれなくても、50年、100年経ったら受け入れられるかもしれない。

その時には、私の「ヒトリヨガリ」の映画が、多くのことを語りはじめるような気がする。

なんにも御返しができなかった急逝されたヒトリや、なんにも御返しができている一人ひとりに、ではない、50年後、100年後の誰かしらに、「映画を創ってくれて、ありがとう」と思ってもらえたら・・・それが、恩返しになるのかもしれない。

そうに違いない・・・

まだまだ創り続けます！！

伊勢 真一